九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No.384

2022（令和4）年12月4日（日）発行

12月4日は**中村哲さんの命日**です。2019年の銃撃死から3年ですが、その遺志は受け継がれ、皆さんの心の中で、ずっと中村さんは生き続けています。中村さんは日本の憲法第9条の尊重を国会で訴えましたが、議員達には理解されず空しかったことでしょう。でも…

原町区錦町、「九条看板」が新しくなりました

2008年8月15日に、会員や市民の皆さんからのカンパで、原町区錦町の県道12号線沿いに設置された本会の「9条看板」。設置から14年が経ち、劣化が進んで文字も薄くなっていました。

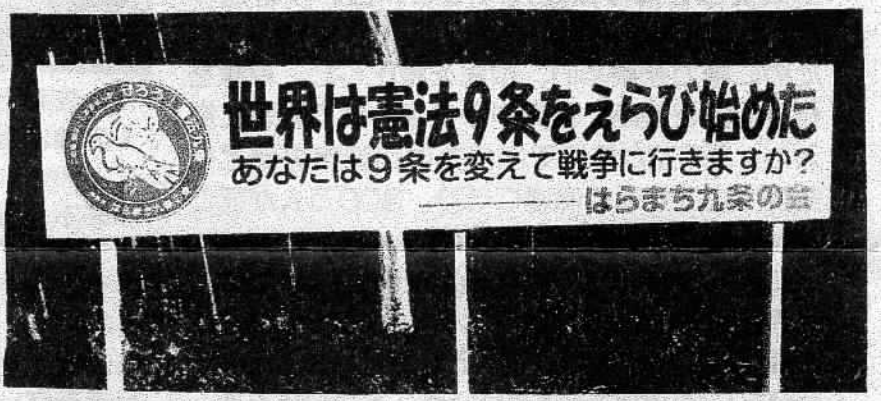
このほど全面塗り替えを行い、**<右写真>**のようにきれいになりました。経費の125,400円は皆様からの年会費で賄われ、報告と感謝を申し上げます。

震災後、全国各地から数百の「九条の会」が被災地視察で相双地区を訪ねますが、必ずこの看板前で記念写真を撮影。小高区の鈴木安蔵住宅とともに、まるで「憲法の聖地」のようです。

京都のある「九条の会」は、この看板を見て大変感激し、多大な支援金を本会に寄せられたこともありました。

この看板には、何か人々を引きつける「力」があるのかもしれませんね。

○看板の大きさは、横450cm、縦90cm、全部の高さは240cmです。



「看板」周辺は、秋のコスモスの咲く頃が一番美しいようです。

「9条看板」案内図

会員さんの投書

平和や反戦への思い、郷土の歴史が次の世代に受け継がれますように

被爆体験後世に企画展見て願う

南相馬市・佐藤 喜彦（アルバイト 34）

南相馬市立博物館で開催されている企画展に合わせて開かれた平和学習講座に参加しました。

広島平和記念資料館から招かれた講師が、原爆が投下されるまでの流れや現在の取り組みを解説しました。学生時代の授業では簡単にしか学べなかったことが、今回の講座で詳しく聞けました。

被爆者は約35万人。放射線による急性障害で亡くなられた方は約14万人と言われていますが、数字では表せない一人一人の命の重さを感じました。核兵器によって罪のない方が一瞬で亡くなり、後遺症に悩まされるということは今でも続いています。

核兵器が拡散している世界情勢は、日本にとって決して人ごとではないはずです。企画展では広島・長崎の両県で被爆した方の貴重な話が展示され、被爆体験した方に取材した貴重な映像も上映されています。南相馬市は核兵器廃絶平和都市を宣言しています。この宣言が次の世代にも引き継がれていってほしいと願います。

<右>の十一月十一日付『福島民報』の投書は本会の会員さんのものですが、平和や反戦の思い、また郷土の歴史をしっかり受け継いでいます。

今から五十年前、「原町市憲法を守る会」が護憲活動を行い、市に働きかけて『憲法』冊子を発行させます。私たちの「はらまち九条の会」は『憲法』復刻版を発行するなど、「守る会」を受け継いで活動しているのかもしれません。（事務局 山崎健一）

No.384

会員さんの寄稿

鈴木安蔵に思うこと

南相馬市原町区　志賀達次

“明治の政治屋”が悲惨な敗戦を招く

明治22年制定の大日本帝国憲法は、第一に王政復古を掲げたとんでもない古い中身だった。“明治の政治屋”の自分達の欲望を満たすために権力を振るい、市民を弾圧した。軍隊を作り他国を侵略。世界中から嫌われて戦争に突入し、昭和20年までに日本中の都市の殆どは空襲で焼け野原の廃墟になり、300万人が死亡し、本当に悲惨な敗戦でした。

にもかかわらず、日本の現在の教科書では、明治維新や明治時代を近代化のピカピカの時代と美化して記述している。それをそんなもんかと反発もしないのは一体どういうことなのだろう。

鈴木安蔵が過ごした部屋に入ったり

私と鈴木安蔵は直接関係はないが、ちょっとだけ安蔵のご子孫と関わりがありました。

安蔵の姉のテルさんはずっと小高に住んでいて俳人でした。俳号は「瑛女てるじょ」で、俳句の世界では中央で活躍されていた。そのテルさんの長男が鈴木学さん。学さんと奥様千代さんの長男が「鈴木新樹君」で、新樹君は安蔵の甥の子、又甥またおいにあたります。私は双葉高校の教員の時、新樹君のクラス担任でした。

「林薬局」の屋号で薬屋さんだった鈴木家の母屋。「林」は安蔵の母ルイの実家の姓でした。▶

父兄面談会があると、新樹君の父は欠かさず出席していた。それで親しみが湧き、私は鈴木家と付き合うようになった。小高の新樹君の家、つまり鈴木家が営む林薬局に家庭訪問し、安蔵が昔少年時代に過ごした部屋にも入った。薄暗い小さな部屋だった。

ある時、新樹君は私に上品な冊子を届けてくれた。一面青の表紙に「瑛女二十句」と銀文字で書かれている。読んでみると、透明で爽やか、背後には温かさがある句でした。数句を･･･

雪虫の目の高さより離れ去る
凍蝶のほろりと石のぬくみあり
生死一如秋の袷のしつけとる
山茶花晴れ老後すべてを全うし

▲安蔵と姉のテル。1967年11月に小高区吉名の鈴木家墓地で。墓は2014年仲町に移された。
（2018年11月24日付『福島民報』ふくしまの人より）

鈴木安蔵は旧制相馬中学のとき、上級生が下級生を虐める伝統があった。彼は正義心からストライキを起こし勝ち取った。旧仙台二高に入ってから、猛烈に外国語を学んだ。大学進学の時、東大教授の哲学翻訳を読んで失望し、東大行きを蹴って京都大学に入学する。

当時の日本は貧しく、貧困をなくすにはどうすればいいかを考えた。ところがある日特高が現れ、「親分の名を言え」と酷い拷問を受けた。彼は考えた。特高をつくったのは“明治の政治屋”。それに反抗するものは拷問や死刑で処した。

安蔵は貧困救済は何かと学びに入ったのに、拷問を受けて考えた。特高が動いたのは、「反対するものを罰せよ」という明治憲法である。彼はこの憲法に正面から立ち向かい、ズバ抜けた語学力で世界の法律や憲法を学び、日本の法律の違いを鮮明に知った。

奥様が新憲法成立の影の第一人者

そして終戦後まもなく、憲法改正の声が上がった。いろんな団体が動き出したが、その中で松本烝治の憲法草案（松本試案）は、戦前の明治憲法の一部改正に過ぎず、GHQは保守的すぎると激怒し、破棄するよう政府に突きつけた。

そこで鈴木安蔵は、憲法研究会のグループに請われてされて出席し、憲法改正は世界で通用する内容であるべきと提案した。彼は会議の中で孤立したり挫折しそうになった時、励まして「頑張れ」と支えてくれた人がいた。それが安蔵の妻の俊子さんである。新憲法成立の時、話題は沢山あったが、俊子さんの話は殆ど出ていない。が私は俊子さんこそ、新しい日本国憲法成立の影の第一人者だと思っている。

こうして新憲法の中身は殆ど安蔵案で、彼の案は、当たり前に通用している「世界の法律」である。しかし今でも、市民平等、主権在民などしっかり根付いているとは言えないが。

（2022年11月記）